

闇の一聲

つちだりうたらう
土田龍太郎

保度度岐須とは鳥の鳴き聲をやがて名とせるものにて、これを寫せる文字いとさまざまなり。時鳥、子規、郭公、杜鵑、不如歸と記すはつねのことなれどこれにしも限るべからず、さながら數へあげむもえうなかるべし。同じ鳥を望帝と言ひまた蜀魂とも呼びなせるは、かつて望帝と名乗りし蜀王杜宇、死ての後その姿ほととぎすに變りけりと古へより語り傳へこしゆゑなりとぞ。かくほととぎすを亡き人の魂に擬へあゝの世のことも寄そふるは唐土に限らず、ここにも死出の田長と呼びて黃泉ぢに通ふものに言ひなし、あるはまたこの鳥の鳴聲をまねばむものつひに血嘔くとも説きければ、昔より人の愛でてやまぬこの鳥、まがまがしき方たえてなしと言ひがたかるべし。ほととぎすあだし鳥の巢に卵を産むを習ひとせり。されば鄙び言にも鶯の巢をかり枕などと言ひくたすはさるものにて性惡しきこといみじければ、夏の夜すがら起きぬて初音待つまでのほどこそあらめ、この鳥まことはひたぶるにめでたきにしもあらざることを明けきなり。

月星もささぬ夏の夜半、ふと匂ひくる花桶に昔の人の袖の香をなつかしみはかなくて過ぎにし方の戀しさいとどつとりゆくままにひとり寝ざめの床のべに、山より里にいつしか來鳴くほととぎすの一聲にうちおどろかれぬるをりの心地げにこの世のものとも思はれず。二聲まではさらに聞えねば、夢かうつつか定めかね、かつなつかしくかつあやしきこととわりにもすぎたり。なぐさめかぬるわが心の闇、うつつの闇になほまさりておぼゆればものぐるほしきことなにとへむすべもなくおぼゆるぞかし。

聲や夢闇こそうつつほととぎす

令和元年十一月二十五日受附

